



若狭湾岸の伝統工芸探訪

—小浜を中心に—



北前船

奈良教育大学 教授 岩本 廣美

京都に近い「若狭」の小浜

福井県南部の若狭湾岸一帯は、かつて「若狭」とよばれ、現在の小浜市（以下、小浜）がその中心地でした。『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』（以下、地図帳）p.69に掲載の主題図「②むかしの境界」に「若狭」と示されているとおりです。p.70「⑤江戸時代の交通路」を見ると、小浜は、日本海を往来した船（「北前船」ともよばれます）が立ち寄った港の一つだったことがわかります。

地図帳p.27～28「①近畿地方」（図1）によれば、小浜は、現在の京都市中心部（以下、京都）まで直線距離で100kmに満たない位置にあり、京都に近いこともわかります。小浜は、海と陸の両面で歴史的に交通の要所に位置していたといえます。今回は、こうした歴史のなかではぐくまれてきた小浜の伝統工芸を訪ねてみます。

小浜を歩く

地域版地図『わたしたちの小浜市地図』で、小浜の市街地中心部のあたりを見ると、海に近い平野部に市街地が広がっていることが読み取れます（図2）。古い時代に、北川と南川という二つの川が上流から運んだ土砂がこのあたりにたまり、平野になったと考えられます。北川と南川にはさまれた「うんぴん」（雲浜）付近には、城跡（小浜城）の記号が見え、江戸時代には城下町だったことがうかがえます。東小浜駅の南東方向に見える寺の記号に



図1 『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』 p.27～28
①近畿地方（100万分の1、原寸）

は「こくぶん寺」（国分寺）の説明があり、小浜が奈良時代当時からひらけていたことを示しています。

図2から、現在「小浜新港」という漁港があることはわかりますが、江戸時代の港がどのあたりにあったかはわかりません。しかし、江戸時代の小浜には、若狭湾岸でとれた魚介類のほか、日本各地から運ばれたさまざまな物資が陸揚げされ、若狭街道（通称「鯖街道」）とよばれた陸路で京都まで運ばれたものもあったことでしょう。一方、京都からはさまざまな情報や文化が伝えられ、それらが小浜の伝統工芸をはぐくんでいったと考えられます。



図2 地域版地図
『わたしたちの小浜市地図』(編集/小浜市社会科学研究会小学校部会)
(5万分の1, 85%縮小)

小浜の伝統的工芸品

地図帳におさめられた100万分の1などの基本図では、日本各地で伝えられてきた伝統的工芸品の生産地が、製品のイラストで示されています。地図帳p.27(図1)の小浜付近で探すと、「若狭ぬり」と「めのう細工」が見つかります。

「若狭ぬり」は、日本各地でつくられてきた漆器の一つです。卵殻・貝がら・金箔で模様をつけ、漆をいくえにもぬり重ねてから石や炭で研いで模様を出す、「研ぎ出し」の技法を用いていることが特徴です。地図帳では盆のイラストが示されていますが、現在の製品は箸の割合が比較的多くなっています(写真1)。



写真1 箸の「研ぎ出し」のようす(著者撮影)

「めのう細工」は、貴石細工の一つです。原石は半透明のくすんだ灰色をしています。熱を加える「焼入れ」という工程で、あざやかな赤などの色に変化します。この熱の加え方は経験による技術を要する工程です。きれいに発色した素材を削り、装飾品などさまざま

まな形に仕上げていきます(写真2)。原石はもともと小浜付近で産出したといいますが、明治時代後半から北海道のものを船で取り寄せるようになり、現在はほとんど外国からの輸入に頼っています。



写真2 「めのう細工」の例
(©公益社団法人 福井県観光連盟)

「若狭ぬり」、「めのう細工」とともに江戸時代の小浜城下町で本格的につくられるようになり、伝統的な手法が現在まで受けつがれてきたものです。しかし、工程は手作業によるものが多く、根気を要する仕事ばかりです。そのため、現在は後継者の育成が大きな課題になっています。

日本各地で、特色のある伝統的工芸品が受けつがれてきました。それぞれに、小浜の「若狭ぬり」や「めのう細工」で明らかになったように、独自の地理的・歴史的背景があるはず。それぞれの伝統的工芸品を改めて見直すことによって、おそらく新しい発見があるにちがひありません。本稿が、そのための手がかりになればと思っています。